

＜伊雑宮御田植祭＞

伊雑宮は日本に於ける最高神、天照大神を祀る内宮の別宮だが、ここの御田植祭は日本三大御田植祭と言われている奇祭である。そして、実は本来の神宮とも言われている伊雑宮。伊雑宮とその御田植祭には何が隠されているのか？

(1)伊雑宮と瀧原宮

倭姫命世記に依れば、倭姫巡行経路はヤマトから伊賀、近江を経て美濃、尾張、そして伊勢の地へととなっており、立ち寄った地点が元伊勢となっているが、これはかなりの遠回りとなり、約 60 年掛かっている。そして、伊勢に着いて神宮創建後、日本武尊が立ち寄って倭姫命から草薙神剣を授かっているから、倭姫命は当時としても相当な長寿だったことになるが、記紀は年代操作が行われていることからすると、これもそれに合わせたものと見なすことができる。

また、伊勢国に入った倭姫命が天照大神の鎮座地を求めて宮川を遡った際、美しい地を見つけて大御神の宮を定めたとあり、これが瀧原宮の創祀とされる。しかし、現在の外宮が宮川のほとりに鎮座していることからすると、わざわざそこから更に川を遡る意味は不明であり、普通は川を下るだろう。

従って、次のように考えるのが妥当と思われる。すなわち、海部氏・物部氏の邪馬台国（ヤマトの国）から秦氏の大和朝廷に権力委譲された後、祭祀はヤマトから見て太陽の昇る東の端にあたる伊勢国へと遷された。ヤマトから東にひと山越えればそこは瀧原の地であることからすると、当然、山を越えて川を下って行くことは容易で、そうすると、最初の到着地は宮川のほとり、瀧原の地と考えられる。これが瀧原宮である。そこから更に下って伊勢湾に出て、最終的に志摩の磯部の地に落ち着いた。これが伊雑宮であり、原・神宮である。つまり、倭姫命世記の記述とは逆に、創祀は瀧原宮→伊雑宮の順で、「合わせ鏡」である。また、各地の元伊勢や倭姫命の巡幸経路は、不老不死の妙薬とされた水銀朱（硫化水銀）の産地とほぼ重なり、海部一族の尾張氏や度会氏が水銀朱を求めてヤマトから移動した経路と見なすことが可能である。こうなると、本当の最初の神宮は瀧原宮とも言え、それを暗示するが如く、瀧原宮はミニ内宮とも言える造りになっている。

この瀧原の近くには、船木という地名がある。瀧原宮の中には御船倉（みふなくら）があり、御正殿の古い御船代（みふなしろ）を納める所とされており、船木は御船代と深い関係にある。神宮と同じ御神紋を有する住吉大社の住吉大社神代記に依ると、住吉大社の神職である船木氏の祖、大田田神の子孫に伊瀬川比古命（イセツヒコノミコト）がおり、伊勢国の船木に鎮座している、とあるから、瀧原の近くの船木がこれに相当し、瀧原の地はイセツヒコが治めていたということである。

このイセツヒコ＝伊勢津彦は伊勢の語源ともされる神だが、伊勢国風土記逸文には次のようにある。

“神武天皇の東征に随行してきた天日別命（アメノヒワケノミコト）は、紀伊国の熊野までたどり着いた時、天皇の命により伊勢に進み入った。その邑には、イセツヒコという神が居た。イセツヒコは、天日別命の国譲りの要請を断ったため、天日別命は兵を挙げ、イセツヒコを殺そうとした。イセツヒコは最初は抵抗したものの、結局降伏し、信濃国に住み移った。”

出雲の国譲りそのものであり、天日別命は武甕槌神（タケミカヅチノカミ）、イセツヒコは諏訪大社の祭神・建御名方神（タケミナカタノカミ）に相当する。これを裏付けるかの如く、伊勢国風土記逸文の別の一説には、イセツヒコは出雲の神の子・出雲建子（イズモタケコ）とされており、出雲の神を大国主と見るならば、その子、建御名方神そのものである。また、イセツヒコの亦名が櫛玉命とも言われているが、これは大国主の幸魂奇魂である大物主神の別名だから、大国主そのものとも言える。いずれにしろ、当時の権力に最後まで抵抗していた海部氏系のスサノオと団体あるいはその子孫であることは間違いなく、海部氏系の暗示である。

伊勢は都から山を隔てており、鬼門に配置されて都を護るような位置ではない。また当時、鈴鹿に関があったが、伊勢はそこよりも東に位置するので、これなどは崇りを恐れるが如く、都から遠ざけられているような配置である。そして、この関から東を関東、西を関西と言ったことからすると、伊勢はまさしく東国にあたり、しばしば登場する“東国征伐”は何も現在の静岡や東京などではなく、伊勢や尾張付近だったのである。これからしても、海部氏系が抑え込まれたことが明白である。

船木氏は海神を祀る住吉大社の神職であり、住吉神代記所収の生駒神奈備山本記に依れば、船木氏の遠祖である大田田神が大八島国の天の下に日神をお出し申し上げた、とあり、同・船木等本記に依れば、大田田命（神）の兄、神田田命が日神をお出し申し上げて、とされている。このような由縁から、船木氏は祭祀に於いて“日神を出し奉る”ことを職掌としており、造船をも職掌としていた。

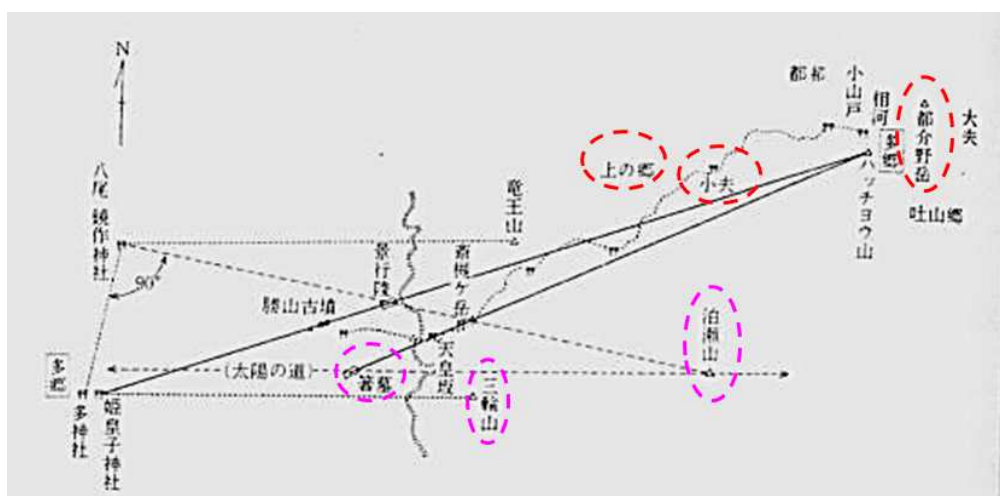
また、播磨国風土記の賀毛郡猪養野条に依れば、“日向の肥人（クマヒト）朝戸君（アサヘノキミ）が天照大神の鎮座する舟に猪を持って参上して奉り”とあり、「天照大神が舟に鎮座する」ことが記されている。これなどは、エジプトに於いて「舟に乗って航行する太陽神ラー」の影響を思わせるが、①住吉大社で三海神と共に祀られる神功皇后のモデルが卑弥呼であること、②その卑弥呼が新羅征伐の際にまとっていた鎧に着いていた御紋が花菱で、住吉大社の神紋であると同時に、天照大神を祀る神宮の神紋と同じであること、③女神・天照大神のモデルは卑弥呼ではないかと言われていることからすると、船木氏はまさしく、天照大神の御神体をお納めする御船代に関わっていた一族なのである。

更に、船木は海部氏と関わりが深い。海人族の海部氏の祖である卑弥呼をモデルとした神功皇后と三海神を祀る住吉大社の神職という点だけではなく、丹後にも船木という地名があることから伺える。丹後国風土記に依れば、竹野の郡、船木の里の奈具の村に、海部氏の主神たる豊宇賀能賣命（トヨウカノメ

ノミコト) = 豊受大神が奈具社で祀られている、とある。かつて、丹後は大陸や半島との交易の玄関口だったので、海部氏の籠神社もかつてはこちら側にあったと考えるのが妥当であり、従って、船木の奈具は海部氏のかつての本拠地とも言える場所なのである。そして、三重テレビで放映された「伊勢神宮 心のふるさと (2,015 年 4 月 23 日放映分)」では、“船木という名称は外宮創建に関わりが深い”と広報課の方が述べられていたことも、これを裏付ける。

そうすると、船木氏及び瀧原の地の船木は、外宮・内宮共に関係が深いということになる。外宮御鎮座の由来について、何故か記紀では触れられておらず、止由気宮儀式帳のみに記載がある。それは、“雄略天皇の夢に天照大神が現れ、自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の等由気大神（トヨウケノオオカミ）を近くに呼び寄せるように、という御神託を受けた”からだという。外宮御鎮座は内宮御鎮座から約 480 年後となっているが、①天皇の在位期間を機械的に西暦に当てはめて計算すると年数が一致しないこと、②記紀は内宮創祀始を繰り上げるために年代操作が成されていること、③お一人では食事が安らかにできないのに 480 年もそのままだったのはおかしいことからすると、内宮と外宮は同時創祀と見なすのが適切である。それに、籠神社の極秘伝では“天照大神 亦名 豊受大神”で“二神一座 一神二座”とあることから、権力委譲後の正式な祭祀場として選ばれた伊勢の地にも、同時遷座されたと考えるのが自然である。その最初の到着地が瀧原ということである。

瀧原の船木は外宮創建に関わりが深いことから、おそらく、豊受大神は瀧原の地に留まり、天照大神は更に御遷座され、志摩の上ノ郷（かみのごう＝神の里）の地に辿り着かれた。鏡を御神体として天照大神を祀り始めた卑弥呼の邪馬台国は都介野（つげの）岳を拝する小夫（おおぶ）にあり、その地は“上の郷”という地名からも、天照大神を祀った地は志摩の上ノ郷である。しばらくはその状態だったが、その後、秦氏に依る新制神宮が創建されるにあたり、現在の地へと御遷座されたのだろう。



瀧原宮には、瀧原宮と後に創祀された瀧原竝宮（たきはらならびのみや）がある。（皇太神宮儀式帳では瀧原宮一院一号で、延喜太神宮式では別号とされているため、創建当初は瀧原竝宮は瀧原宮に含まれ、後に分祀されたと考えられる。）外宮や内宮の構造からすれば、瀧原宮が天照坐皇大御神御魂（アマテラシマススメオオミカミノミタマ、天照大神の正式名）を祀るならば、瀧原竝宮はその荒御魂（あらみたま）を祀るはずだが、実際には瀧原宮と同じであり、参拝順序は瀧原宮→瀧原竝宮である。そして、豊受大神こそこの国の根源神であり、それを継承して外宮先祭ということからすれば、瀧原宮は外宮、瀧原竝宮は内宮の象徴であり、元は“天照大神 亦名 豊受大神”で“二神一座 一神二座”の暗示でもあると言える。すなわち、瀧原宮は内宮別宮とされてはいるものの、船木という地名からしても、本質は伊勢に於ける元外宮と言え、対する伊雑宮は元内宮である。瀧原竝宮は瀧原宮とは同格ではなく、伊雑宮と同じく月次祭の幣帛には預かっていなかったことは、共に隠された元内宮を暗示していると言える。

瀧原宮の所管社には、若宮神社（祭神：若宮神）、長由介（ながゆけ）神社（祭神：長由介神）、川島神社（長由介神社同座、祭神：川島神？）がある。若宮は“若御魂”に通じ、天照国照尊＝天照大神を祀った海部氏の祖である卑弥呼の暗示であり、長由介神は御饌の神とされることから、海部氏の豊受大神の暗示である。そして、瀧原宮の下流にある多岐原（たきはら）神社は内宮摂社で、瀧原の手前で倭姫命を出迎えたと言われる真奈胡神（マナゴノカミ）を祀るが、これは“真名籠”で、海部氏の真名井神社と籠神社の暗示である。

以上、内宮別宮・遥宮（とおのみや）とされる瀧原宮と伊雑宮は、神宮創建に関わる元宮である。

(2) 心御柱

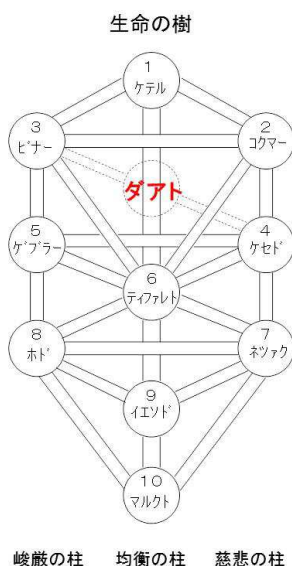
新制神宮を創建するにあたり、天照大神は内宮、この国の根源神たる豊受大神は外宮とされ、伊雑宮は隠された。そして、御正殿床下には心御柱が打ちこまれた。それが、イザナギとイザナミが天御柱の周りを回って国造りしたことで暗示されている。すなわち、神宮に於いて最も重要なものは心御柱であり、別名が忌柱、天御柱、天御量柱で、新制神宮の心御柱を中心として、秦氏に依る新たな国造りが開始されたということである。

心御柱は高床式の御正殿直下に打ちこまれている柱で、神宮神職すら口にすることも憚れるほど神聖なものとされている。かつては、伐採された御用材が都まで運ばれ、天皇の背と同じ長さの印が付けられ、神宮に戻されてからその長さに切られて整えられた。すなわち、心御柱は天皇の分身ということである。明治以前、神宮では物忌童男と童女が御饌を奉り、特に重要なのは、童女の大物忌が心御柱に対して神饌を供え、御遷宮での心御柱の立て始めの役割を担ったことだった。これは、13歳のトヨが大邪馬台国として国家を統一した時の祭祀が継承されているわけで、童女とその父親の神官という祭祀体制である。

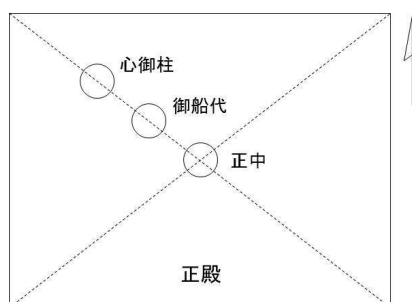
神宮の心御柱の大元は籠神社の八角形の心御柱で、更にその元はフェニキア

のベテル（セム語で“神の家”）と呼ばれる高さ 1.5 メートルほどの一本石柱で、神の存在と座のシンボルと見なされていた。これが後に、旧約でヤコブが枕にしていた石を取って記念碑として立て、その場所をベテル（神の家）と名付けたことの原型である。

さて、神宮の心御柱は出雲大社で発見されたものと同様、3 本一束となっており、3 分の 1 が地中に打ちこまれ、「生命の樹」となっている。「生命の樹」には蛇が 3 回転半で巻き付いており、これはクンダリーニの上昇を暗示するが、根源のエネルギー・シャクティとしても表現されるので、シャクティと天皇が一体化した暗示でもある。（蛇足ながら、これが諏訪大社の元の神、ミシャグチ＝御シャクティ＝神シャクティの真相でもある。）神宮での祭祀では庭上祭祀が行われるが、これは心御柱＝神シャクティと一体となった天皇を見上げて行うためである。



心御柱は通常、建物の中心（正中、せいちゅう）に位置する大黒柱のことだが、神宮の心御柱は、実は外宮、内宮共に正中から西北方向にずれており、正中には見かけ上、何も無い。これを“心御柱の正中外し”と言う。何故、建物の最も重要な正中を外してあるのか？



それは、更に重要な物が正中の位置に存在するという暗示である。つまり、御正殿の東南方向により重要な物が存在するということである。外宮から見て東南方向は内宮だから、外宮にとってそれは内宮であり、内宮から見て東南方向は伊雑宮だから、それは伊雑宮である。この方向は、伊雑宮の元である籠神社と伊雑宮を結ぶほぼ直線方向である。

また、心御柱は「生命の樹」であり、白い絹で3ヶ所縛られていて、下の3分の1が地中に埋まっている。上の各3分の1は御正殿と心御柱に対応しており、下の3分の1は地下殿の存在を暗示している。

すなわち、“心御柱の正中外し”とは、伊雑宮が封印されていること、地下殿が存在することを暗示する仕掛け（カバラ）である。

さて、心御柱の別名が表向き忌柱、天御柱、天御量柱とのことなのだが、実はこれらはすべて別物である。秦氏の中核は原始キリスト教徒であり、彼らにとって最も重要な御神体と共に渡来してきた。それは、イエスが掛けられた本物の聖十字架である。聖十字架は十字型ではなくT字型で、横木（パティブルム）と縦木（スティプス）が取り外し可能で、横木は約1.6メートル、縦木は約4.8メートルである。この横木が忌柱、縦木が天御柱である。刑場では縦木が立ててあり、そこに手首を打ちこまれた罪人の横木を滑車で乗せた。よくある、イエスが十字架を背負って刑場へ引かれていく絵画は誤りで、刑場へ引かれる罪人は横木だけを背負わされた。

これらは元の形に復元され、内宮御正殿正中の地下に安置されているという。残る天御量柱は、青銅の蛇が巻き付いていた“モーゼの旗竿”で、外宮に安置されているという。ただし、外宮御正殿は内宮のように石垣が組まれた丘のような状態ではなく、御正殿の重量からしても、地下に穴を掘って安置することは困難と考えられる。そこで、外宮境内を見渡すと、別宮・多賀宮は小高い丘の上にあり、豊受大神の荒御魂が祀られるが、籠神社の極秘伝では“豊受大神の荒御魂は天照大神の和御魂”とあり、ここの地下が最適である。また、御正殿側から別宮を見ると、中心が多賀宮、向かって右が土宮、左が風宮という配置だが、これを「生命の樹」に当てはめると次のようになる。

・峻厳の柱：風宮、均衡の柱：多賀宮、慈悲の柱：土宮。

多賀宮は過去、高宮と書かれ、至高の宮である。シュメールの最高神はアヌであり、地球の主エンキは地球の土から作った道具を用いて人類を創成し、その弟の風のエンリルは、エンキが創成した人類を最初は快く思っていなかったことからすると、次のように性質的に完全に対応する。

・峻厳の柱：エンリル、均衡の柱：アヌ、慈悲の柱：エンキ。

よって、天御量柱は多賀宮の地下に安置されていると考えられる。では、伊雑宮には何があるのか？

T字型十字架の上には罪状が書かれた板が置かれ、イエスの場合、“Iesus

Nazarenus Rex Indaeorum (ナザレのイエス、ユダヤの王)”とギリシャ語、アラム語、ラテン語の3言語で書かれた。絵画でしばしば見られる“INRI”とは、この略語であり、これはまた“INaRI=稲荷”でもある。この罪状板が伊雑宮にある。“名”があるからこそ、伊雑宮が本来の神宮たり得るのである。そして、伊雑宮の心御柱となるのは、邪馬台国で神の依り代とされたアロンの杖である。

(3) 名を外すことの意味

このように、伊雑宮には神の名があるわけだが、心御柱の正中外しは、いわばこの名を外しているわけである。では、名を外すとはどういうことなのか？

宇宙の歴史からすると、宇宙創造のエネルギー自身が、自らが何なのかを知るために、生命体とその活動の場（器）となる宇宙を創成した。それにより、エネルギーの塊の状態ではできなかった、“感覚”というものを通して感じ、様々なことを認識・経験し、進化できるようになったのである。

その生命体が物質を認識したり、自らと他を区別するためには、名が必要となった。（自己の誕生。）それは単に、識別のためだけのものだった。しかし、ある時から所有欲が発生した。それが更に進んで、自らが元来の生命エネルギーの分身（己、巳）であることを忘れてしまった。いわゆるエゴである。これはとりわけ、アヌンナキが人類に対して“神”として振る舞い、人類が神を自らの外に求めることによって促進された。それにより、人類はエゴを発達させてしまったのである。言い換えれば、エゴという鎧をまとうことに依り、本来の性質（本質）が解らなくなってしまったのである。

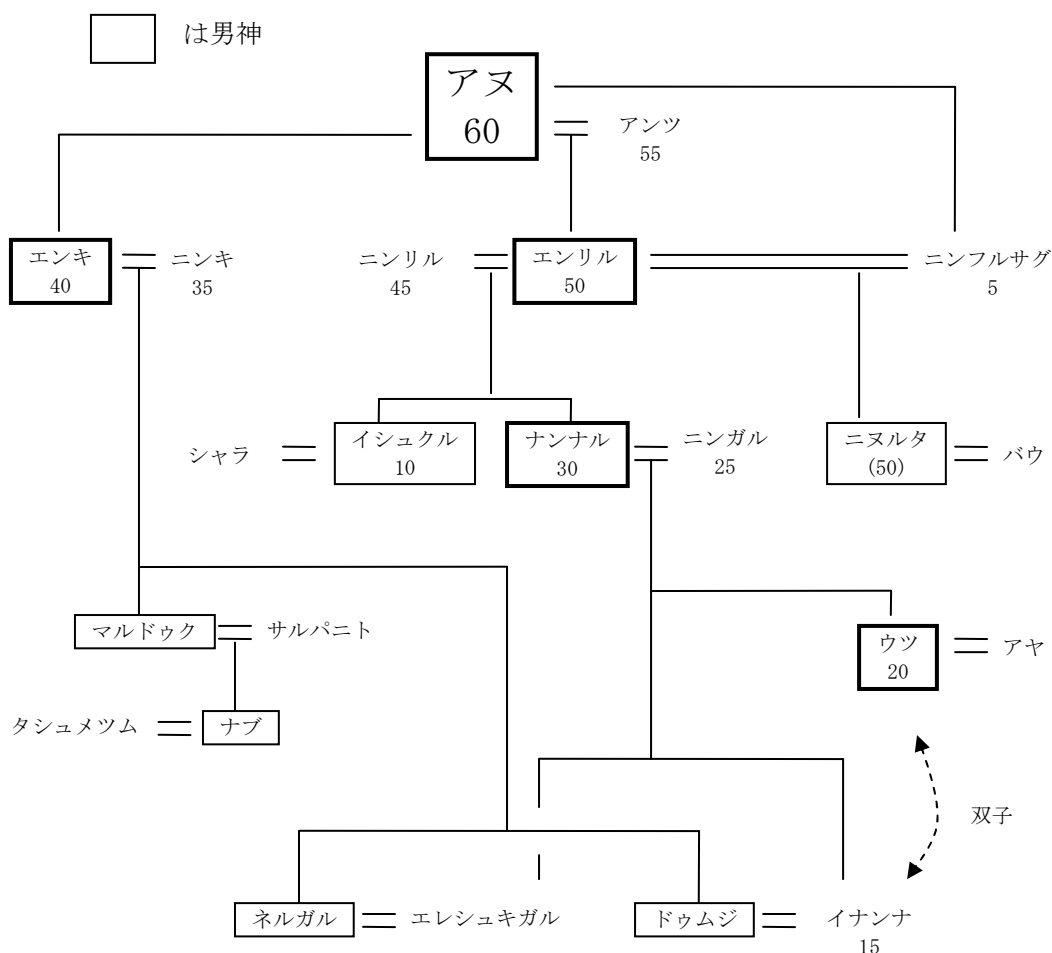
イナンナのインダス文明では梵我一如、ギリシャではヘルメス思想があったので、本来は解っていたはずだが、アヌンナキは原人を遺伝子操作して人類を創り上げ、自らを人類に対する“神”として振る舞うことにより、いつの間にか人類に大きくびきを負わせた。（むしろ、エゴを解消するという全宇宙的な宿命により、地球と人類を最終的な学びの場とさせられた、とでも言うべきか？だから、地球＝知球＝知宮と命名されている。他の言語では、決してこの真理は解らない。）

しかし、真相を知る者が、神の名をみだりに唱えないために、名を外した。それは、神の名“在りて在る者”も同じことであり、その象形文字が勾玉の形であり、漢字では“己、巳（生命体としてのシンボルは蛇）”である。（後述）

なお、宇宙創造のエネルギーは、一般的に想像するような人型の存在ではなく、善悪を裁いたり、人類が頼ったり、現世利益を叶えたりするような存在ではないので、ここでは元来の意識という意味で“起源意識”と称する。また、人類は起源意識の分身であり、それが集合して起源意識の一部及び全体を形成する。そのため、“多くの志が和す”ということで、“和多志”とも称する。これは、海神で地球の主であるエンキを祀る日本総鎮守で、海部氏と同族の大山祇神社の由緒書きにも書かれている神の名称である。

(<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-category-2.html>)

また、以下はシュメールの神々＝アヌンナキの系図である。系図に於ける数字は王位継承数字であり、アヌが最高の 60 で、10 ずつ下がっていく。各配偶神の王位継承数字は、それよりも 5 小さい。



(4) 勾玉と眞名井

勾玉と神器的に同等なのがマナの壺で、海神の所で、勾玉が壺にくっついて離れなくなった話は、壺と勾玉が同一物扱いという暗示である。そのマナには、日本語では、“眞名”という字が充てられた。この“眞”の字は、人が首を下向きにしている状態を象ったもので、“顛（てん：逆さま）”の原字である。つまり、この世の物質世界は、主体である起源意識が客体となった状態なのである。

現在はこの真意が封じられている壺＝井戸のような状態だから“眞名井”であり、故に、眞名井神社を奥宮とする籠神社は名が外された伊雑宮と表裏一体となり、神宮の鳥居は額束（がくづか）の無い名が外された神明（＝神名）鳥居となる。言い換えれば、“名”とは両刃の剣のようなもの故に、エゴを断ち切るという意味も込め、剣も神器とされた。もう 1 つの神器、勾玉は“眞名”の

壺にくっついているため、起源意識の御魂である。

そして、「生命の樹」の3本柱はシンボル化されて三つ巴となった。二つ巴では陰陽のバランスが取れているだけで、上昇も下降もしない。三つ巴となって、ようやく螺旋状に上昇（進化）・下降（退化）する。本来は上昇すべきだが、神の名をみだりに唱えたことによってエゴが発生し、故に、元とは異なった存在となり、エゴによって「生命の樹」を鏡像反転した「死の樹」を下降してしまっているの、それを食い止めるためにもう1つ、必要となる。それがメルカバーで、神宮の御紋である。

・一つ巴

この宇宙や生命体が現れる前の起源意識そのもの。形としては勾玉。巴＝己＝巳で、字が表す如く、蛇のエネルギーでクンダリーニ。いわゆる“1つ目”。唯一絶対神と言えるが、一般的に絶対神という言葉を使うと、聖書的な人格神をイメージしてしまうし、聖書の神はシュメールの神々の集合体でもあるので、ここでは敢えて絶対神とは言わない。

なお、神を表すヘブライ語はアルファベットの Y に相当する「'（ユッド）」であり、一つ巴や勾玉の形である。

・二つ巴

生命体のほとんどが2つ目であることから、プラスの陽子とマイナスの電子（と中性子）から成る起源意識から生成された物質界。いわゆる“2つ目”。陰陽拮抗し、上昇も下降も無い。

・三つ巴

いわゆる“3つ目、第3の目”。これは、超能力的なものだけではなく、カバラの奥義を知って宇宙の真理を悟る能力も意味する。いずれの能力にしろ、その人独自の能力ではなく、本来誰にでも備わっている能力で、起源意識の力を意識的・無意識的に利用しているに過ぎない。

陰陽の拮抗状態から脱し、螺旋的に上昇あるいは下降する。上昇は進化・発展だが、見方を間違えると、上昇しているつもりが下降していることになりかねない。すなわち、「生命の樹」に於ける上昇か、それを鏡像反転した「死の樹」に於ける下降状態の暗示である。

現在の地球は、エゴに依る物質的豊かさの追求のあまり、精神性や生命そのものが蔑ろにされた「死の樹」に於ける下降状態である。「生命の樹」を上昇しているつもりが、必死に「死の樹」を下降してケリポット（精神の地獄）へと堕ちこんでいる状態である。また、起源意識の力を意識的・無意識的に利用しているに過ぎないのに、自らが神と一体となったかの如く勘違いしている人達も同様である。なお、いわゆる“ピラミッド・アイ”でもあるが、“絶対神の目”ではないことは明らか。

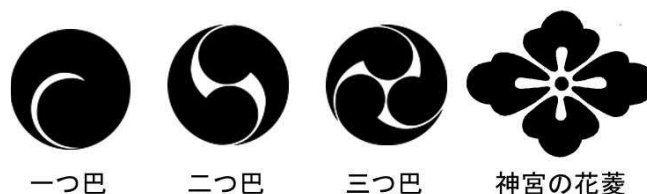
・花菱

真理を悟り、起源意識と一体化した状態で、いわゆる“4つ目”。この状態に

至るには、すべての存在が起源意識の一部であり、それが起源意識全体を構成しているという自覚をすべての高等生命体（＝人類）が持つことが不可欠。

現時点では、人類はこの状態に至っていない。3つ目の状態の人類が一定数を超えた時点で一気に覚醒し、残されたすべての人類がこの状態に至ると考えられる。至ることができるかできないかが、“右と左に分けられる”などと預言されている。

神宮の御紋は中心の十字と丸が日本を暗示し（陰陽的に十字が四角と同等で、日の丸となる）、4つ目に至るための中心となる国は日本であり、最終的に日本が世界の盟主になるということ。また、4枚の花弁は聖書で言うところの“神の戦車メルカバー”で、諏訪大社の御柱（おんばしら）でもある。御柱は上社本宮、上社前宮、下社春宮、下社秋宮で各4本の計16本であり、十六花卉八重表菊紋＝日本を暗示する。また、菱形も御柱もイナンナのシンボルだが、イナンナは豊受大神に重ねられ、根源神＝起源意識の暗示でもある。



この花菱＝4つ目を具体的に暗示しているのが、京都の吉田神社追儼式（ついなしき）である。この追儼式では、黄金4つ目の仮面を被った方相氏（ほうそうし）が赤、青、緑の鬼を追いやる。鬼の色は混合すると黒になるから、まさに暗黒の邪気＝エゴの象徴であり、黄金＝起源意識の光でもってすべての闇を祓い、人類進化のあるべき姿を暗示しているのである。

(<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-entry-13.html>)

方相氏



<http://www.linkclub.or.jp/~uno/A604yt-yoshidatsuina.htm>



<http://kotohurari.web.fc2.com/event/02yosi01.html>

*御神体としての鏡

多くの神社には御神体として鏡が置かれており、参拝者はその鏡の中の自分を拝むことになる。

宇宙創成時に生成した反物質は、CP 対称性の破れにより消滅してこの世界は物質で満たされ、鏡の鏡像反転は放射性物質のベータ崩壊などを除く物質世界の基本原理である。だから、鏡像反転した「合わせ鏡」の“自分”は“神”そのものということになる。そうすると、“鏡=かがみ”には“かみ”の中に“我=エゴ”があるから、自分自身を見つめて気付きなさい、ということである。

(5)御田植祭

伊雑宮の真意が解ったところで、ようやく本論である。ここの御田植は一般的な御田植よりも遅く、毎年6月24日に行われる。何故、この日なのかは、聖書にヒントがある。

“伊雑”という名称は、初めて救世主の登場を預言した預言者イザヤを暗示し、旧約のハガイ書には、エルサレム第二神殿の建設に取り掛かった日が6月24日とされており、これが起源である。これにより、伊雑宮こそ本来の神殿、本来の神宮であることが堂々と示されている。

さて、御田植祭会場の畔にはゴンバウチワという大きな竹柱が立てられており、中心の太い柱を忌竹と言う。それは神話に登場する天御柱の別名、忌柱に由来するが、神宮では“忌”という字は“この上なく清浄”と言う意味で使われ、例えば、毎日の神饌を準備するための火は“忌火”と言われている。しかし、普通は人の死に関わる場合に使われる。

そのゴンバウチワには、目出度い宝船と“太一”という文字が書かれており、神宮を象徴するとされる文字だが、陰陽道の基になった中国の道教では天に於ける不動の星、北極星を意味する。しかし、神宮は太陽神を祀る宮だから、これは矛盾している。

“太=太秦の太=ウズ”で、イエス・キリストのことをヘブライ語ではヨシユア・メシアッハー、アラム語ではイシュ・マシャ、メソポタミア東部やインドではイズ・マシと言うが、もし太秦が“イエス・キリスト”の転訛だとすれば、“太”は“イエス”という意味になる。イエスは人類の贖罪を背負って十字架に掛けられたので、ある意味、人類にとっての光でもある。そうすると、“太一”は“唯一の光、イエス”を表すことになる。ならば、“忌”という人の死に関わる字が使われていることも矛盾しない。

肝心の御田植祭だが、午前中にまず、早乙女たちが苗場を3周半する所作で苗取りが開始される。3周でもなく4周でもなく3周半なのだが、これは「生命の樹」に3回転半で巻き付いている蛇の暗示である。日本では確かに蛇は神様の扱いだが、ユダヤ教やキリスト教では忌み嫌われる存在なので、聖書的解釈は間違いである。

その後、畔に立てられていたゴンバウチワを立人が3回あおぎ、神田の中心に向かって倒す。これは、「生命の樹」に於ける三柱の神を暗示する。

そこに、下帯姿の近郊漁村の青年たちが集まり、勇壮な竹の奪い合いが行われる。その奪った竹、特に宝船の描かれた紙の付いた竹は御利益があるとされ、各自が持ち帰って船に供え、大量祈願などのお守りとされる。もし“太一”が前述のようにイエスの暗示ならば、この竹片はイエスの体の一部で、そのイエスの体を分け与えるということは、聖体拝領となる。あるいは、十字架に掛けられたイエスから剥がされた服をローマ兵が破って分けたことの象徴である。

その竹取り神事が終わると、御田植が始まる。多くの場合、少女に扮して舟に乗った7～8歳の童男1人が太鼓を打って囃し立て、「エンヤー」の掛け声を掛ける。何故、男の子が女装するのか？「エンヤー」は神宮式年遷宮行事の御木曳きやお白石持ち行事などでも掛けられるが、どういう意味なのだろうか？

伊雑宮は内宮の別宮で、天照大神をお祀りする。その天照大神は女神である。ならば、実はイエスが祀られていて、イエスのシンボルの十字架は陰陽としては陰となるから、カバラの「合わせ鏡」により、女神に変えられていると見なすことは可能である。また、英語の“ark”はラテン語の“arca”に由来し、これには“箱船”“契約の箱”の両方の意味が含まれている。この童男の乗っている舟が契約の箱だとしたら、契約の箱の贖いの座にイエスが居ることになり、まさにイエスは十字架に掛けられ、人類の罪を贖ったわけである。



<http://www.dydomatsuri.com/archive/2014/isobe/>



<http://www.canno.jp/blog/-201406241>

しかし、この祭りは御田植で、豊穡を祈る神事である。イエスには、残念ながら豊穡の象徴は無い。「生命の樹」に3回転半で巻き付いている蛇もまた、十字架上のイエスという解釈はできないことはないが、聖書では蛇は忌み嫌われている。それに、漁師が田植をするので、イエスを暗示しているだけのお祭りではない。

(6) 隠された神々

世界中で豊穡神の根源神と言え、シュメールの女神イナンナである。豊穡の女神の象徴をバラバラにして埋め、豊穡を祈るということは世界中で見られるが、田の中でゴンバウチワをバラバラにして奪い合うことは、まさにこれと同義である。そして、イナンナは航海の女神でもあるから海人＝漁師の守り神で、太陽女神でもあるから“太一”にも相応しい。

神話では、イナンナは姉によって木（「生命の樹」）に掛けられて死に（仮死状態）、地球の主エンキの使者から与えられた「生命の水」によって復活したから、イエスの原型でもある。また、イナンナは美の女神ヴィーナスであり、シンボルは金星で、イエスのシンボルもまた“輝く明けの明星＝金星”で一致している。

イナンナはインダスの最高神でもあり、その本質はシヴァ神だが、シヴァはイナンナの奔放な“性”を受け継いでおり、根源の蛇エネルギー・シャクティである。従って、「生命の樹」に巻き付いている蛇は「生命の樹」に掛けられたイナンナの暗示でもある。また、豊受大神も根源のエネルギーと言われ、豊穡神でもあるから、豊受大神はイナンナである。そして、根源のエネルギーは起源意識そのものだから、巴＝己＝巳で、蛇のエネルギー・クンダリーニである。これが、“忌＝己・巳の心”の真意である。

イナンナは海洋民フェニキア人の主神アシュタルテ（イシュタル）でもあり、フェニキアという地名はフェニックスに由来する。フェニックスとは、イナンナが好物だったナツメヤシの学名であり、ナツメヤシは中東で「生命の樹」とされる。また、フェニックスは不死鳥＝火の鳥でもあり、それは“復活”のイナンナを原型としている。

日本は古代から、大陸の東の果てにある不老不死の国とされ、丹生（水銀朱、硫化水銀）が不老不死の妙薬とされた。これは朱色で、正しくは丹（に）色と言うが、神社等の装飾の色として利用されているのも実は不死鳥の炎由来で、神々の不老不死、永遠の常若を願うものである。

不死鳥に因んで元号を“朱鳥（あかみとり）”と名付けた天武天皇は大海人皇子で海部氏系であり、海部氏の実質の最高神は豊受大神ことイナンナである。海部氏の祖は天村雲命（アメノムラクモノミコト）で、その名から解るように、天叢雲剣（鉄剣）を大王の印として持っていた。これはスサノオの暗示で、スサノオ＝牛頭天王＝シヴァで、これもイナンナの暗示である。スサノオの八岐大蛇退治の話の元は、太陽女神を主神とするヒッタイトの竜神イルルヤンカシュの話で、イナンナを暗示する女神イナラシュによって退治された。

また、天村雲命はエフラム族の大王の印として、神の降臨の依り代（神籬）であるアロンの杖も持っていた。アロンの杖は芽吹いたとされ、その様子は草が絡まる剣のようでもある。すなわち、草薙神剣である。そして、海部氏の兄弟分家が尾張氏であり、神器は他の氏族が持つてはならないから、剣は尾張氏の宮に安置されているのである。（海部氏の宮には、八咫鏡のオリジナルであり、祖先の卑弥呼が神事で使い始めた息津鏡・辺津鏡がある。）

エフライム族はサマリアの大王家であり、サマリアはショムロンと言って、“小さなシュメール”という意味だから、シュメール直系の大王家でもある。サマリアはフェニキアと隣り合い、互いに交流していたので、最高神はイナンナだった。そのフェニキアの長けた航海術に依り、太古の日本列島にやって来て、宗像三神＝イナンナを最高神とする縄文人（環太平洋文明圏）と容易に和平を結び、邪馬台国（ヤマトの国）として国家を統一できたのである。

縄文は青銅器文化だから、鉄器文化には敵わない。スサノオが十拳剣（とつかのつるぎ）で八岐大蛇の尾を切った時に刃が欠け、その尾から出てきたのが天叢雲剣である。この神話は、銅剣で切ったら鉄剣に当たって刃が欠けた、ということの寓話で、天叢雲剣が鉄剣であることを暗示している。

さて、“エン”という言葉はシュメール語で“支配者”とか“主”を意味するので、掛け声「エンヤー」は「主ヤー」という意味になる。籠神社の極秘伝に依れば、かつてこの国の最高神の名は“ヤー”と言った。“ヤー”とは広義の意味では“天之御中主神 亦名 豊受大神 亦名 天照大神”ということで、ヘブライ語の「主」でもあるが、狭義の意味ではシュメールの神々であり、海神で地球の主エンキ（大山祇神）、この国の最高神で豊穰神・太陽女神・航海の女神のイナンナ（豊受大神）、イナンナと双子の太陽神ウツ（天照大神）である。特に、イナンナに「生命の水」を与えた主エンキは、蛇をシンボルとする根源神でもある。

・峻厳の柱：ウツ、均衡の柱：エンキ、慈悲の柱：イナンナ。

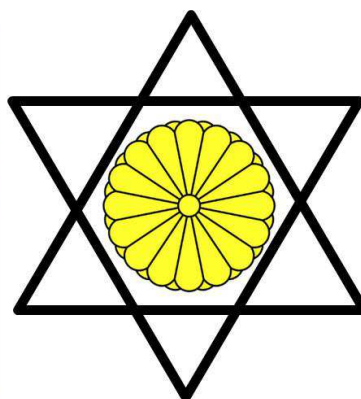
蛇をシンボルとする神としては、エンキの息子で智慧の神ニンギシュジッダがいるが（前述の系図には未記載だがマルドゥクと異母兄弟）、エジプトではトート（ヒヒ）、中南米ではケツアルコアトル（太陽神）とされており、崇高な神として人類を正しい方向へと導いたので、導きの神でもある。猿で導きの神と言えば猿田彦大神で、天孫降臨の際、天の八衢（やちまた）で高天原から葦原中国までを照らしていたので、天照国照神であり、これはケツアルコアトルの性質とも一致する男神の太陽神でもある。

そして、猿田彦大神はイナンナがモデルの天細女命と結婚したとされる。前述のシュメールの神々の系図では、男神の配偶女神は王位継承数字がその男神よりも5小さいが、イナンナは15、ウツは20で、両者は王位継承数字的には夫婦と見なしても良い。すなわち、夫婦神ということで、ウツとニンギシュジッダは重ねられ、共に天照国照神である。また、ケツアルコアトルが最高神のマヤでは20進法が採用され、数字的にウツとニンギシュジッダの重なりである。これにより、三つ巴（エンキ、イナンナ、ウツ）から花菱（エンキ、イナンナ、ウツ、ニンギシュジッダ）となる。

“太秦”の“太”も太陽神ウツの転訛であり、故に“太一”は“唯一の光、太陽神”という意味にもなる。イエスはユダヤの王とされ、エルサレムの王なのだが、ウツはエルサレムを管轄する司令官だった。また、イエスは主の教え

に反する者達を厳しく弾劾したが、ウツは人類に律法を授ける法の支配者でもあり（峻厳の柱）、いずれにしても、イエスとウツの性質は一致している。そして、イナンナはイエスの原型であり、ウツとイナンナは双子だから、ウツにもイナンナが重なる。ウツのシンボルは太陽である六芒星、イナンナはロゼッタが元となっている十六花卉八重表菊紋だから、神宮参道や伊雑宮の前にある神武参剣道場の石灯籠には、この2つの紋が刻まれている。

伊雑宮は海部氏の宮だが、内宮別宮なので、女神・天照大神の宮である。御田植は豊穰の祈りだから、豊受大神の宮であるとも言え、太陽女神で豊受大神ならば、イナンナである。また、伊雑宮の神紋は六芒星だから、男神の太陽神、ウツの宮でもある。イナンナとウツは双子だから、シンボルの重なっても矛盾しない。



ここで、女装した男の子の太鼓打ちだが、地元の方の話に依れば、古くは女の子だったそうで、男の子が行う場合は女装する、とのことである。ならば、本来は女の子だと見なすべきで、舟に乗った太陽女神で豊穰の女神、すなわち、イナンナということである。これは、前述の播磨国風土記の記述“天照大神の鎮座する舟”と一致する。

以上、伊雑宮の御田植祭はシュメールの神々に豊穰を祈る神事である。そして、そのメインである豊受大神（イナンナ）には地球のエネルギーも重ねられており、内宮の別宮でもあるから、光のエネルギー（起源意識）も重ねられている。神話では、天照大神は“太陽神”とはどこにも書かれていない。天照大神は光を司る神であり、その本質は、陰のできない、すべてを遍く照らす“お蔭様の光＝起源意識の光”に他ならないのである。

2,014年の伊雑宮御田植祭では、太鼓打ちが女の子となり、本来の姿に戻った。その前年の御正宮の御遷宮でも、御神宝装束の唐櫃がかつての漆塗りのものに戻されたことは、古代の真相復活を思わせる。しかも、2,014年は伊雑宮御遷宮のあった年で、出雲で（旧暦と新暦の違いはあるものの）“神在月”と言われる10月に、出雲族と皇室の婚礼が行われたという歴史的和解（*）があった。これ

にて、いよいよ“終わりの時”に向けての準備が整ったと言える。

それに合わせるかの如く、国常立尊＝豊受大神＝ウシトラノコングシ＝地球のエネルギーの解放として御嶽山が狼煙をあげ、予定していなかった籠神社奥宮・眞名井神社の御修繕が突如として決定した年でもある。

* 出雲族と皇室の歴史的和解

海部氏よりもやや遅れて渡来した徐福一団は海部氏と婚姻関係を結び、物部氏として海部氏を大王家とした邪馬台国を建国した。そして、徐福系の中核は出雲氏となり、祭祀は海部氏系と共に手を携えて行っていた。

しかし、原始キリスト教徒の秦氏の渡来後、王権委譲を迫られた。最初は拒否していたものの、ある時、御神宝を管理していた出雲氏一族のある者が、管理者の留守中に御神宝を渡してしまった。事の次第を知った管理者は、その者を策略で殺害してしまったのである。これをきっかけに、王権は最終的に秦氏に委譲された。

これ故に、出雲系の神は何かにつけて祟る神であり、直系の子孫が丁重にお祭りしなければならず、王権を委譲された側の秦氏の大王家も、出雲を格別の待遇を持って丁重に扱わなければならなくなったのである。現在でも、出雲国造の代替わりがあった際に、新任の国造が宮中に出向いて「出雲国造神賀詞（いずものくにのみやつこのかんよごと）」という寿詞（よごと）を天皇に対して奏上するのは、出雲の神の御加護が無ければ、国が亡ぶということを意味する。

これが、両家の婚姻に依り、ようやく和解が達成されたのである。



<http://www.canno.jp/blog/-201406241>